

2026. 1. 11 (日) マタイ 2 : 19 ~ 23

2:19 ヘロデが死ぬと、見よ、主の使いが夢で、エジプトにいるヨセフに現れて言った。

2:20 「立って幼子とその母を連れてイスラエルの地に行きなさい。幼子のいのちを狙っていた者たちは死にました。」

2:21 そこで、ヨセフは立って幼子とその母を連れてイスラエルの地に入った。

2:22 しかし、アルケラオが父ヘロデに代わってユダヤを治めていると聞いたので、そこに行くのを恐れた。さらに、夢で警告を受けたので、ガリラヤ地方に退いた。

2:23 そして、ナザレという町に行って住んだ。これは預言者たちを通して「彼はナザレ人と呼ばれる」と語られたことが成就するためであった。

<説教>

私たちの主イエス・キリストは天の父なる神のみこころに従われ、〈ご自分を空しくして、…人間と同じようになられ…人としての姿をもって〉(ピリピ 2:7)、ヨセフとマリアの子としてこの世に生まれてくださいました。生涯をかけて〈自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで〉父なる神の御意思(みこころ)に〈従われました〉(同 2:8)。

そういうお方として御子をこの世にお遣わしになった父なる神も、イエスが十字架の死に至るそのときまでは人間の手にかかって殺されることがないように、幼子イエスを捜し出して殺そうとしているヘロデ王の手からイエスをお守りになりました。そして更に、悔い改めることなく、それどころか「ユダヤ人の王誕生」の知らせに逆上し、自分の欲望に従い、幼子イエスを殺そうとした、即ち神に敵対し、神に戦いを挑んだヘロデ王に神が「報復」なさいました。〈ヘロデが死〉(19)んだのも「神に打たれた」からと見るほかありません。なお、後にそのヘロデの孫であるヘロデ・アグリッパ(一世)も「キリストのからだ」なる教会に(それは即ち教会のかしらなるキリストに)敵対し戦いを挑み、神に栄光を帰さなかった故に主の使いに打たれて死にました(使徒 12 章)。彼も自分の祖父の生き様、死に様を教訓として学んでいなかったということでしょう。

一方、「私が知らせるまで、そこにいなさい」(13)と御使いによってヨセフにお命じになった神は約束通り、御使いによってヨセフに知らせてくださり、なすべきことを教えてくださいました(19-20)。〈幼子のいのちを狙っていた者たち〉と言われているので、実はヘロデの他にも、ヘロデと心を同じくして〈幼子のいのちを狙っていた者〉がいたのでしょう。それはヘロデの最初の妻の子、アンティパルだったという説があります。ただし、そのアンティパルにしても、後に自分の父ヘロデによって殺されたのでした。

さて、ヨセフは再びの神の命令にもすぐに従いました(21)。しかし、すぐに次の問題に突き当たりました(22)。〈アルケラオ〉は父ヘロデと同じく残忍な人でした。ヘロデの死後、B.C.4 年から A.D.6 年までユダヤを治めることになりますが、そのあまりの残忍さの故に人々から嫌われ、ローマ皇帝に訴えられてその地位を剥奪されてしまいました。そしてユダヤはローマ帝国に直接管理されるようになり、総督が派遣され置かれるようになりました。そういうわけで、ヨセフが恐れを抱いたのは無理もないこと、再びの命の危険—自分だけでなく、幼子イエスやその母マリアも被るもの—を予想した、人間として、親として、夫として当然の恐れだったと思います。

しかし、また次なる神の守りと導きが用意されていました(22)。それはあの東方の博士たちになさったのと同じ方法でした(12)。このように神は少しずつ、徐々に、一歩ずつ、そのときそのときに応じて、善きみこころをもってご自分の民を導いて行かれます。

こうして幼子イエスとヨセフとマリアはガリラヤ地方の〈ナザレという町に行って住むことになりました(23)〉。このときイエスは幼子でしたから、人(の子)としてはヨセフたのような恐れや不安を自覚していなかったかもしれません。しかしヨセフ(と母マリア)に連れられ、共に行動することで、イエスも人として〈恐れ〉を共有されました。イエスはその幼い時から私たち人間の恐れ不安をもその身に負ってくださいました。そのイエスの目は、「この世の王」の身勝手な支配(その最たるものの一つが戦争です)の下で、自分では選ぼうがなく過酷で命の危険や様々な恐怖に脅かされる悲惨な境遇のもとに生まれ育っている幼子たちその他の人々のうえに、昔も今も同情と慈しみをもって注がれているに違いありません。そして彼らに代わってそんな王たちに最終的に「報復」なさいます。

さて最後にマタイは、幼子イエスが両親に連れられて〈ナザレという町に行って住んだ〉のは〈預言者たちを通して「彼はナザレ人と呼ばれる」と語られたことが成就するためであった〉と言います(23)。ただし、「彼はナザレ人と呼ばれる」という言葉そのものは旧約聖書にはありません。イザヤ書 11:1 には「エッサイ(ダビデ王の父)の根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」とあり、この「若枝」という言葉と「ナザレ」という言葉がヘブル語では同じ文字、似た発音です。また、士師記の中ではサムソンのことが「ナジル人」と言われ、創世記 49:26 ではヨセフ(ヤコブの子)のことが「選り抜かれた者(ナジール)」と記されていて、ギリシャ語の「ナザレ」と似た発音となります。確かにイエスこそは神が〈預言者たち〉によって約束なされた「ダビデの子」なる王、神によって特別に聖別され選ばれた「ユダヤ人の王」、更にはここでは「ガリラヤ」に代表されている異邦人の王、すなわち全ての人の王です。見た目には父ヨセフに連れられてエジプトを出てイスラエルの地に入りましたが、本質的には真の王なる主イエスが今度はファラオならぬヘロデをさばき、打って、「出エジプト」なさいました。ヘロデでもヘロデの子孫でもない、ダビデの子孫イエスこそは悪魔と罪の支配に打ち勝ってユダヤ人も異邦人も私たちすべての人間を罪と永遠の滅びから救い出し、神の御支配のもとに入れてくださるお方、救い主なる王なのです。

しかし、〈ナザレ人〉とは当時のユダヤ人の間では軽蔑、悪意のこもった呼び名でした。「キリストはガリラヤから出るだろうか。」(ヨハネ 7:41)、「よく調べなさい。ガリラヤから預言者は起こらないことが分かるだろう。」(同 52)と言われました。ガリラヤの人々の間でさえも「ナザレから何か良いものが出るだろうか。」(同 1:46)と言われていました。〈ご自分の民をその罪からお救いになる〉お方(マタイ 1:21)、〈その名はインマヌエル(神が私たちとともにおられる)と呼ばれる〉お方(同 23)、〈大いなる者…いと高き方の子…神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えにな〉り 〈…その支配に終わりはありません〉というお方(ルカ 1:32-33)、神の御子であり、神であるお方イエスが〈ナザレ人〉と呼ばれて人々から蔑まれました。確かに、〈この方はご自分のところに來られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった〉のです(ヨハネ 1:11)。これがイエスがこの世でその生まれの初めから人々からお受けになった扱いでした。そして生涯でも祭司長、律法学者たちを始め、人々から軽蔑され、拒絶されました。そのことも、「彼には見るべき

姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、…人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。」（イザヤ 53:2-3）、「しかし私は虫けらです。人間ではありません。人のそしりの的民の蔑みの的 です。私を見る者はみな私を嘲ります。」（詩篇 22:6-7）等のように〈預言者たち〉が語っていたことでした。イエスをそのように見て、嘲り、ついには殺した。それが私たち人間の罪です。イエスの十字架の死はそんな私たちの罪のためでした。

それで、私たちはイエスを軽蔑し、拒絶し、殺した人間であることを認めて、罪の赦しを求め、イエスに信頼して神に立ち帰りましょう。王なる救い主イエスを信じ、感謝と喜びをもってイエスに従い、イエスを誉め称えて歩みましょう。イエスがお受けになったような蔑み、悪意ある扱いをイエスのゆえにイエスとともに受けることになるとしても。